

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 学校法人星美学園 静岡サレジオ小学校 (※正式名称を記載)
種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}
 中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校
 教員養成大学 専修学校、各種学校
 特別支援学校
 その他 (例: 小中高一貫)
※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒424-8624
静岡市清水区中之郷3-2-1

E-mail prim3@ssalesio.ac.jp
Website http://www.ssalesio.ac.jp/primary/

幼児児童生徒数 男子 154名 女子 191名 合計 345名
幼児・児童・生徒の年齢 6歳～12歳

2. 報告期間

平成29年4月～平成30年3月

※報告書提出時点～平成30年3月末までの活動は、予定(見込み)として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800字程度+活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項1-1、2-1に対応

当校は、「国際理解・福祉教育を中心に据えたオーストラリア姉妹校との共同ESD授業の実現」を活動テーマとして、ESDを持続可能な社会の創造のための国際理解・多文化理解教育と捉え、ESDの実践を通してコミュニケーション力の育成を目標とした。

具体的には、内容言語統合型学習、縦割りグループによる福祉教育、朝霧イングリッシュキャンプ、オーストラリア修学旅行を柱に、①言語教育を通じた資質向上に係わる活動、②奉仕活動に係わる教育、③多文化理解に係わる学習、④異文化コミュニケーションに係わる学習を行った。

① 外国語学習を通じた資質向上に関わる活動

当校は外国語学習の目的を言語力向上だけに留めず、CLIL(内容言語統合型学習)の実践を通して国際理解や多文化理解を促すように努めている。今年度の実践の一つとして、日本の俳句の文化と欧米で広がりつつある「HAIKU」の違いを調べ、英語版「HAIKU」の創作を行った。それにより、日本の俳句のもつ、短い音で情景を表すことによって心情を表現する奥深さを改めて感じ、自国の文化伝統の魅力を感じた。また、自ら創作することにより文化の違いを理解するとともに、英語表現の幅も広げることができた。

② 奉仕活動に係わる教育

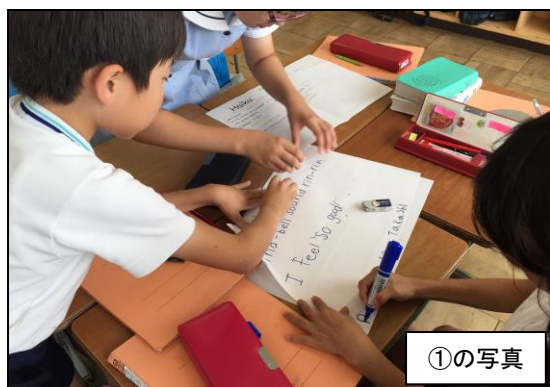
全校児童が縦割りグループに分かれ、世界中の困っている友達や地域の人たちのためにできることを実践した。チェルノブイリ原発事故や東日本大震災でいまだに不自由な生活を送っている人たちのためにハッピーランチデーを設定し、実感のこもった義援金への協力を呼び掛けている。またそれと同時に地域のお年寄りとの繋がりづくりや、活力向上のための季節の贈り物を自作してお渡ししている。それにより、Think Globally, Act Locally の精神を育て自らができることの実践を促している。

③ 多文化理解に係わる学習

毎年オーストラリア姉妹校から数名の教師と数名の児童を静岡に招き、交流を行っている。姉妹校の教師が主導になって、当校の児童と英語スタンプを創作・発表したり、オーストラリアの伝統的なスポーツを体験したりする活動は児童に文化の違いとそれぞれのよさを体感させる機会となっている。この活動は6年次でのオーストラリア修学旅行に繋がり、多文化理解から相互理解に繋がる機会となっている。

④ 異文化コミュニケーションに係わる学習

6年生は、これまでのESDの集大成として毎年すべての児童がオーストラリアでのホームステイプログラムを経験する。9日間のすべての活動が異文化でのコミュニケーション力を育む機会となっているが、今年度のオーストラリア姉妹校の先生による英語での授業や生活体験・スポーツ体験は、アボリジニーの生活や歴史を伝える内容でより児童たちに国際理解や文化の違いを気づかせる内容であった。また、ともに授業を受ける児童たちとのコミュニケーションやディスカッションを通じた気づきはグローバルな視点を育み、国際社会で生きる私たちにこれからも継続的にできることを考えさせる機会となった。



(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野 (複数選択可)

<input type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input checked="" type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input type="checkbox"/> 10. 食育	<input type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力 (複数選択可)

<input type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input checked="" type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間 (複数選択可)

<input type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input checked="" type="checkbox"/> 5. その他(学校行事: オーストラリア修学旅行にて)	

エ. 使用した教材 (書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名)

とくになし

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

特別活動の時間として充てている外国語活動を CLIL(内容言語統合型学習)を用いて行う。その中で用いる内容をユネスコスクールとしての活動も含むように位置づけしているため、各学年が適宜、国際理解教育や文化多様性の内容を実施するようにしている。指導計画としては、年間4回3時間程度ずつの授業時間を割くようにし、それ以外授業内のトピックを用いて内容への理解を深めることとしている。またアウトプットの間として、5年生の朝霧 English Camp とオーストラリア修学旅行を設定し、外国人との交流の場で国際理解や文化多様性についての理解を深めている。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

基本的に学級担任が受け持つ外国語活動の時間と縦割りグループによる全学年の奉仕的な活動をリンクさせることで、すべての教員が Think Globally, Act Locally の精神を持って国際社会のためにできることとそのための人材育成について考える環境を整えている。カリキュラムを整えることで日常的に取り組めるようにする半面、活動の内容や方法に関しては、適宜社会的背景や児童に合わせて考えるようにしている。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

内部評価としては、教員同士が指導法に関する協議を行ったり、授業を見せ合ったりすることで目標達成に近づくことができたか短期間での評価を行っている。6年間継続的に行うことで児童の国際理解や多文化多様性への理解は深まっていると感じるが外部からの客観的評価を得られていないため、今後の課題としたい。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度) ※チェック事項 2-2 に対応

オーストラリア研修旅行の活動報告会を経て、国際社会で生きるために必要な資質を伝えた。それにより学内での学びの共有がなされ、個々にできることは何か考えさせるきっかけとなった。ESD 推進拠点校として対外的な発信に乏しいため、今後の課題としたい。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)
(200字程度) ※チェック事項 2-3 に対応

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟からの依頼に応える形で書き損じはがきの提供に協力させていただいた。公益社団法人日本青年会議所主催の少年少女国連大使事業に賛同し児童の推薦を行った。その結果、参加児童がSDGsについて学び、ニューヨーク国連本部での研修やプレゼンテーションに参加をした。帰国後も学校での報告会などを経て全校児童へのSDGs認知向上に努めた。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度) ※チェック事項 2-4 に対応

国内外のユネスコスクールとの交流やネットワーク形成は、十分でなかった。今後は、近隣のASPUnivNetでもある静岡大学教育学部やESD・国際化ふじのくにコンソーシアムと連携をし、様々なネットワークを広げられるようにする。具体的にはESDカフェに参加することで情報交換をしたり、成果発表会への参加をしたりする。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）
※チェック事項 2-5 に対応

ESD を通じて児童生徒が学内だけの座学にとらわれずに学びのフィールドを広げていく様子が顕著に表れている。そのような背景をもとに学校教育の場がどうあるべきなのか見直しを図り、地域や行政との連携に力を入れて学校経営を行うようになった。

- (3) 平成 30 年度の活動計画（200～400字程度）

テーマ「国際理解・福祉教育を中心に据えたオーストラリア姉妹校との共同 ESD 授業」に沿い、昨年度からの継続的な活動として、外国語学習を中心とした国際理解教育と縦割りグループの奉仕活動などの福祉教育をリンクさせ実行する。具体的には、外国語学習では Think Globally の視点を持って、CLIL（内容言語統合学習）を用いて国際理解、多文化理解、環境、人権、世界遺産などの幅広いテーマ設定をする。そして、Act Locally の考えで自らにできることの実行として実践的な福祉教育に取り組む。また、国内外のユネスコスクールや行政、地域団体との連携を図り、より一層活動の幅を広げていくことで自らの活動を振り返り、学校外の社会に寄与することに努める。